清野吉光氏のコラム

団塊耕志録 第6回

あきらめない！

清野 吉光（きよの よしみつ）略歴

1950年　長野県四賀村生まれ、松本深志高校卒業。1968年上智大学外国学部ロシア語科入学、1971年　中退。その後印刷関係など様々な職業に従事。1976年清水市の日の丸交通入社。1980年静岡市内の事務機器センターに入社。1982年システムオリジンを仲間と創業、専務取締役。1992年代表取締役社長就任。2000年㈱タクシーサイト創立、現取締役会長。２００７年タクシーアシスト代表取締役社長に新任。現在に至る。

「第一次整頓と革新」

オリジンという会社は創業から二十七年目の会社だが、多分どこの会社もそうであるように、何度かの存亡の危機を経験している。一九九五年の夏の数か月、一切の納品、売り上げを停止し「整頓と革新」と称して内部の整頓に集中したことがあった。当時、パソコンが各メーカの独自のハード、言語からＤＯＳ／Ｖの共通のハード、ＯＳに変わり、オリジンも沖電気の独自ベーシック言語で蓄積してきたノウハウが、使えなくなった。しかし一方でＤＯＳ／Ｖパソコンはハード価格の低下、高性能化、さらにパソコンのネットワークＯＳの登場をもたらし、まだまだ当時の事務処理システムの主流であったオフコンに対し、性能面でもコスト面でも優位性をもたらし、一九九二年に関東に進出していたオリジンに、特需をもたらした。しかしそれまで十年に渡り手がけてきた言語を捨て（ざるを得なかったのだが）、新たにネットウェアというネットワークＯＳとＤＢーマジックという言語を採用したばかりのオリジンは、その品質や生産性、保守性の面で混乱し、お客様からも厳しいクレームを頂くことになった。このままではお客様の信頼を失い、会社は崩壊するという危機感から、納品を中止し、プロジェクトチームを作り、集中的に標準となるソフトの開発に注力をし、九月にオリジン初の「セミナー展示会」開催に漕ぎ着けたのである。

一方でこの「整頓と革新」では、営業面でも「コンサルティングセールス」を目指し、プロジェクトチームでタクシー会社のあるべき給与体系を創ってみようと合宿をしたが、結果として、今現在の我々の力ではとても無理だというのが結論であった。そしてもっともっと、タクシー事業者と深く結びつく事なくしては不可能だと悟った。この「整頓と革新」からすでに十四年！…。未だ道半ばという感じではあるが、タクシー業界にお役に立つコンサルティング能力の獲得という望みは捨てた訳ではない。「あきらめない！」ことが目的達成の必要条件だと肝に銘じたい。

わたくしごとだが…

実は一九九五年には、もうひとつ私個人の事で危機的な事があった。当時大学の四年生であった長男が、統合失調症を発症したのである。十五歳から三十歳の間で、長男でまじめな人間の発症の確率が高いと聞くが、まさにそんな典型的なタイプで、急性期の幻聴やそれに促された奇行に本人も家族も苦しんだ。当初はこの病気の知識もなく、次々と起こる異常な事態に随分驚いたが、本人の病識（自分は病気だという認識）が出たことによって薬を服用してくれるようになり、徐々に落ち着いて行った。しかし、完治した訳ではなく、所謂陰性の状態で、社会生活への適応もなかなか難しく、何回も挫折を繰り返す中で、自分との心の折り合いをつけるのに苦しんでいた。この病気は百人に一人くらい発症する病気で、うつ病と並ぶこころの病の代表である。多くの人がこの病気に苦しみ、また

社会の目も厳しい。発症した人の四分の一は病院に入ったまま、出て来れない。また四分の一は退院できるが仕事など社会生活はできない。さらに四分の一は通院しながらも仕事を含む社会生活を送ることができ、そして残り四分の一は完治するそうである。長男は通院しながら、知り合いのサポートにより仕事していたが、ストレスに弱く、最近も大きなストレスを受けて、一九九五年の発症以来の急性期の症状が出てしまった。はじめて二週間ほど入院させたが、かえって悪化したように思う。症状にもよるが、現在の精神疾患の入院は治療というより緊急避難、あるいは隔離という性格が強いので、医者がその必要性を判断して強制的に入院させられる以外は、できるだけ入院はさせるものではないと思った。なんとかしなくてはと思っていた矢先、妻が光明を見つけて来てくれた。医療ジャーナリストの田辺功さんが書いた「心の病は脳の傷」という本である。この本の副題は「うつ病、統合失調症、認知症が治る」というもので、まさに藁にもすがる気持ちで読んだ。従来の精神医学では神経伝達物質セロトニンが少ないとうつ病の症状になり、神経伝達物質ドーパミンが多すぎると統合失調症の症状が出る事がわかっている。しかし脳の器質的な変化は伴わないというのが普通の見解。しかし東北大名誉教授でPETによるがん検診を確立した松澤大樹教授は、独自の脳の断層撮影により、うつ病も統合失調症も人間の感情を司る大脳辺縁系の扁桃体に傷が出来ていることを発見した。そして多くの事例の検証の中から「精神病は感情の座である扁桃の障害に間違いない。対象性や大きさが変わることから、精神病は神経伝達物質のドーパミン、セロトニンのアンバランスと考えられる。発病予防も可能になる」（「お医者さんも知らない治療法教えます」田辺功P二一六）という結論を出し、精神科の専門医ではないが、治療の実験を数年前から始めている。うつ病、統合失調症、認知症は、従来は別の原因で別々の治療法が行われているが、それを基本的に同じ原因とみなし、治療していこうという試み。もちろん既成の精神専門医からは邪道扱いのようだが、自分としては発症以来十四年たってもいっこうに良くならない現実から、この治療法にかけてみることにした。この松澤先生は八十三歳の高齢ではあるが、偶然私の高校の先輩でもあり、何か縁を感じて、もしかしたら光が見えるかも知れないと感じている。予約申し込みから三か月待って、三月十七日に東京駅前のクリニックで特殊なMRIを撮影してもらい、松澤教授の診断を受けた。やはり、扁桃体にうつ病と統合失調症の両方の傷があり、さらにそれが長く続いた結果海馬も少し傷つけ、記憶力が弱まっているという事だった。しかし、長男の脳には自然のiPS万能細胞である神経幹細胞が沢山あり（これも画像で見える）、この細胞が成長して、脳の傷をふさぐことは十分可能、すなわち完治できるとの診断でした。それを聞いて妻は思わず涙を流した…。薬物療法ではドーパミンをおさえる薬だけではなく、セロトニンを増やす薬、さらに食事療法、運動療法、精神療法などを組み合わせ（「バナナ（セロトニンの前駆物質トリプトファンを多く含む）を食べて、太陽の日を浴びながら走れ！」が治療指針）、この傷を自分自身の力で治す事ができる、それもその進行を目で見える事ができるのは画期的だ。残念なのはこの療法が学会ではいまだ認知されず、薬の処方箋さえ、全国の十箇所程度の医者しか出してくれない（静岡もない）。新しいものはなかなか受け入れてもらえず、また必ず正しいとの保証もない……。

でも、あきらめない！ぞ

（二〇〇九、三、二二）

ALCminiⅡ
Alcohol Recording System for Professional
製品貸し出しキャンペーン
コンパクトボディでプリンタ機能搭載！
3ステップの簡便性と高い測定精度を実現!!
スピーディに高精度の飲酒点検が行え、
信頼性の高いアルコール測定記録を残すことができます。

「吹き込む」・「測定する」・「記録する」。
ALC-mini-Ⅱで始めるカシタン3ステップの飲酒点検。
好評発売中!!
＜お申し込み・お問い合わせ＞
株式会社システムオリジン
TEL：03-3834-8352
関東支店営業本部
〒101-0021 東京都千代田区外神田5-3-4-7F
拠点／北海道・東北・関東・甲信越・東海
名古屋・関西・中国・九州
＜製造元＞
東海電子株式会社
http://www.tokai-denshi.co.jp